東日本大震災の経験と人間〈復興〉のディレンマ ——当事者語りと記憶の歴史化のために

全 成坤・鄭 毅*

1 はじめに ——災害記憶の〈歴史化〉への問題

本報告では、東日本大震災の経験を当事者語りを通して、人間復興の意味と歴史化への意義を考察しようとする。まず、災害の「記憶」の再生のなかに含まれる両面性を考察し、その「語り」がどのような「意味」で、聞き手に影響をあたえ、非経験者へ伝えられるのかを考えてみる。その延長で、当事者語りをどのように「歴史化」しているかを再考する。このためにここで、取り上げるのは、民話語り部と「福島県の郡山」の仮設住宅で生活をしている住民の「語り」である。とりわけ、民話の語り部による大震災経験の語りと一人ひとりの一般住民の語りは、その事実性を伝えようとする重要な「声記録」であるからである。それは、声の歴史化への意味と繋がるであろう。

しかしながら、このような語り部が、外来語のタラティヴがもつ「物語」という概念とまざることによって「語／騙る」の両犠牲にさらわれて、その真実性および事実性をどのように考えればいいのかの問題が発生する。そしてもう一つは、地域の「民話」がもつ「民衆の語り＝非国家」的な世界が「一つの〈歴史〉構造」として収斂されてしまう恐れがある。深い悲しみおよび「心が締めつけられるような喪失感＝語り継いでおく」という民話語りの「形態的範疇化」をどのように歴史化へ結びつけるのかの問題であろう。その一方、語り部として「訓練」されていない災害経験者た

ちの語りをどう歴史化していくのかの問題もある。言い換えれば、災害経験が「単に類型化」されず、主体的な語りの多様性を考え、聞き手の「非経験者」が何を聞きとり、何を語り継がればいいのかを「考える」ことであろう。

繰り返せば、当事者の語りのなかで、語りの内容が「選択」されたり、「時系列的な再編」に収まる部分がありうることを考慮しながらも、その「意識される他者」としての「聞き手」は、物語を語る語り部の「当時の視座によって選択的に再構成」されるものであったことを自覚させてくれるであろう。それは、自己経験を語ることで、自己のなかで再編される新しい「自己」は、自分の自我を再構築し、既存のアイデンティティを作り直すことにつながっていくのだと自覚するのである。このような語り、つまり、自覚する「語り」を聞くことができる聞き手も非経験者でありながら、経験者の語りを聞くことによって、自己のなかで存在する「他者」を体験することで、新しい〈自我〉を発見することことが出来よう。これは、語り部と聞き手との間に共通的に「自己内部の他者」を自覚し、その「自覚史」を歴史として受け継ぐことが可能であろう。

2 ナラティヴは〈歴史〉か、〈政治〉か

なぜ、語りと歴史なのかへの答えから始めよう。今まで歴史とは、“‘実証’の証拠（資料・証

*北華大学東亜研究中心（2015年度中国国家社会基金の成果）（15ASS004）

言・あるいは観察から得た事実)に基づく。確からしい事実を積み上げていく作業¹⁾だと定義する。このような尺度からみると、歴史は時間とともに進み、不可逆的な事象として記述される。もちろん、災害を歴史として残すために、歴史化への作業は、歴史保存ネットワークを作り、その構成機関メンバーによって、地震の被害を受けた地方で個人資料の救出とか、保全および「災害文化財等救援」をも大事であろう。しかしながらもう一方で、歴史化の問題で浮上してくるのは、〈記憶〉の概念である。歴史は、過去に関する唯一の正しい語りを決定する権威をもつことで、〈記憶〉に対して優位を保ってきた。しかし、そのような優位性は、個人の経験を語ることが却って歴史的事実の〈真実〉なるものが含まれているのではないかという、疑問が生まれた。それで、権威を失ってしまった〈歴史〉の代わりに〈記憶〉の意義が強調されるようになってきた。そのことによって最近では、〈記憶〉と〈歴史〉は概念が対立するものではなく、相補い合うものとして理解されるようになった²⁾。

だとするならば、どのような意味において「歴史」と「記憶」は、事実と真実を伝えることが可能なのか。この間から一つ浮上してくるのは、記憶の表示の問題であろう。つまり、記憶の表象とか再現の「方法」である。ここで登場するのが、個人経験の語り的问题である。この語りは、英語のナラティブ(NARRATIVE)と結びついているが、このナラティブは“プロットを通じて出来事が配列され、体験の意味を伝える言語形式³⁾”だと定義される。そして、このナラティブ研究は、最近、人文・社会研究の諸方面で注目を集めている。

ところが、このナラティブは、出来事や経験を意味づけ、筋立てる行為として、そこで見出される意味と結びついていく。つまり、カタカナのナラティブは、話し手による「語り」の世界と結合し、そこからまとめられているのは、一般化した普遍的な知の抽出問題である。そのことは、個人の経験をいかに意味づけるかを問い、固有でありながら多様な「世界」を描き出そうとする。そこで、語りが重視されるのは、事象の客観性や普遍性だけでなく、一人ひとりの固有の内面世界をわ

かり合うことの重要性が見直し始めたことを意味する。しかしながら、このナラティブはやや間違とうと〈政治〉と結びつくおそれがある。つまり、個人の経験を生かすといひながら、たとえば災害経験を語る時には自我文化的立場で語ってしまい、非経験者と距離の問題が生ずるのである。それには、個人レベルにおける「理解」の温度差の問題と、それを国家レベルからは「復興」の問題としてとらえられる問題がある。言い換えると国家的次元では「復興」の論理を打ち出し、被害者の体験を「復興」の論理として持っていこうとする傾向がある。すなわち、国家的事件として個人の経験性は、国家の復興の問題として収斂され、非経験者として観察者の立場に置き換えられる。つまり、国家による復興の論理は非経験者のように被災者の外部におかれがちである。被災者の痛みや負担を社会全体がどのように共有するかという議論に入らないままに、外部者である自分の既得権を守る立場をとりがちである⁴⁾。

そこで、やはり、口述とオーラリティ・ストーリーと語り、ナラティブ、事実と個人の立場をどのように構築しうるのであるのかの問題が浮上する。つまり、語りの当事者と当事者性の問題および語りとナラティブが一体化され、国家レベルの「歴史」として収斂されてしまうことの「政治性」の問題である。語ることには、自己や他者の「物語」を語りなおすことで、新しい自己や他者を生成することが可能となるからである。つまるところ、災害の被害当事者の語りのなかにも、'出来事を選択と配列'が変化するし、その変わることによって「語り」自体の変化が行われることである。ここで注目したいのは、出来事を選択と配列を変えることで、語りを変えることの意味である。そこには語り手による自己形成の論理と非経験者への語りが存在し、それは新しいお互いの「自己」語りと理解の「間」が生まれ、それによって再構築の語りが生まれるとのことであろう。

3 東日本震災の語りと歴史・個人・地域の問題再考

では、このような文脈を踏まえて、東日本大震災の災害者ナラティブを通して、新しく「災害と

語り」のもつ意味を考え直してみよう。そのため注目するのは、声を記録することは、何が可能か、また非経験者側に回ってしまう国家による「災害の歴史」関与をどのように受け止め、それが記録され、社会的な「公共的」な視点として取り替えられない視点は提示可能か、または、それぞれの災害体験にみられる局地的な地域の問題と個人の問題は、語る主体による歴史化への問題とどのように絡めていけるかを考えてみよう。

まず、語りがもつ「法則と定型化」の問題を取り上げよう。そして、その構造として語られるものではなく、一人ひとりの対面空間における語りをどのように考えたらいいかを考察する。まず、語りのなかに含まれそうな、オートポエシス（拍動制作）、つまり自己製作を意味する造語であり、日本語ではしばしば自己創出、自己産出とも書かれる言葉に焦点を当てよう⁵⁾。少なくとも、語りのなかには、言い換えれば「当事者としての経験を語ってください」と設定されて、何かの構造に訓練された語りは、与えられたナラティブであり、そのナラティブには、それが事実なのか、空想の作り話なのかは判断できない疑いがありうる。ところが、まずは、語り手がナラティブを通してどのような体験の世界を立ち上げるのか、その理解から始めるのが重要であろう。よく知られているように、東日本大震災「地震」「津波」「原発」による「同時多発的」な災害であった。この意味においては、既存の地震被害論には解決しきれない新しい問題点（脆弱性）をも暴露し、近代社会の問題点を露出することでもあったといえよう。そこでまず、災害被害の当事者による記録の方法が多様化したり、経験を語ることの多様性をどのように「歴史化」するか、または何を歴史化するかをみていこう。

このような問題を考察していくために、本論考では、事例として、民話の語り手たちの大震災語りをみていく。まず、事例①として取り上げられるのは、宮城民話の会のメンバーである語り手による「語り」および「語り直し」、「自己語り」をみていく。この語りは元々、2011年8月21日、22日に開催された「第7回みやぎ民話の学校」においてである。6人の語り手のその後を含めて、「あの日」の体験をもう一度語ってもらって、

それを番組として放送し、さらにDVDに収録したものである⁶⁾。そのDVDを聞き手として分析してみたら、ある意味「構造」に出会うことになる。つまり、「あの日、私たちは言葉を失った。2011年3月11日。住み慣れた故郷を津波が襲った」というメインナレーションから始まって被災者それぞれが現場に行ったりする。そこで、「今はもう何にも建物がないんで、それが一番さみしいですね」と語る。そして、引き続き、深い悲しみと心がしみつけられるような喪失感、呆然自失な日々が続いた。しかし私たちは一歩また一歩と前に歩みだした。これを伝えなければ私たちはだめだと思った。「決して忘れてはいけない3.11の記憶を未来のために語り続けて置きたい」のナレーションが終わって、体験者の語り部は話を始める。

まずは、宮城県名取市のSさんから始まり、現場と語り部の舞台が映されていく。津波が襲ってくる瞬間などリアルに「地震が起こった瞬間から、津波が来るときの話を奥さんとの会話を回想しながら、語るのである。そこには、津波がきて避難小学校へ行ったが、妻が波にのみこまれてしまった状況を語っていく。そして最後には仮設住宅の人々との交流、奥さんへの弔いで終わる。その次に、宮城県亶理郡山元町のSさんの語り、宮城県本申郡南三陸町のNさんの語り部が語る。そして、南三陸町のTさん、福島県相馬郡新地町のOさん、寒風沢島のTさんの語りへと続く。ここで感じられるのは、災害前のそれぞれの地域、そして、跡方もなく失ってしまった現場を見せつつ、家族や近所の方、親戚のなくなったことを語り、避難、そして現実の気持ちを語っていく。それは、「語りはやめようかなあと思いましたが、これを語り続けなければならないと思った」ことを述べ、その重要性を語るのである。もちろんこのような語りは、再び説話や民話、および伝説として記憶されていくのであろう。

このような語りには、やはり、民話語り部の大事な役割を果たしていることは否定できない。自分の「痛々しい」経験を「聞き手」に向かって語るということは、事実の経験でありそれを聞き手が聞くべきであろう。それを認めているうえで、もう一つもっと深く考えなければならない点がある。その語り部の語り、すなわち、ナラティブ

〈儀式〉のことである。たとえば、地震と津波、そして現実を結びつける語りのアプローチには、‘忘れもしない、あの日言葉をうしなした、住み慣れたふるさとに津波がおそった、悲しみ、今はもう何にもない、喪失感、深いかなしみ、茫然自失の日々、しかし一步一步と前に歩みだした’ことの構造化の部分である。これは、「語り継ぐ」ことに対する、言い換えれば‘伝えなければならないこと’が選定されていく「意図および主体性」である。すなわち、一人ひとりの私の語りが、何か「決して忘れてはいけない3.11の教訓および未来のために語り継いでおきたい」ことへの統一性に向かっていくことであろう。ここには、民話の語り部の「アイデンティティ」の問題が浮かび上がってくる。それは、民話の語り手による民話の「構造」と同じく、語りが「形態」を帯びていくことである。

もともと民話は、民話を通して‘現実のできごとを正しく見つめ、その本質を正しく見抜き、不合理を不合理として認識する力’を育てることであり、それこそが民話が果たすべき重要な「意味」として浮上する。そこで、民話語り部による災害経験の語りの中には、重層的にみえて一つのボタン化現象がみられる。もちろん、事実を語る個人の経験は、語りの定型化にみられる「規範的な伝え」に収まりきれない部分が存在し、主体的な語りとは何かの問題を投げかけるのである。つまり、本質を正しく見抜くことの意味と、自分をとりまく文化状況に対して無批判に受け入れがちなことの意味である。そこで、語り部による語りには、事実としての記憶を「収集」する意味合いとしては重要な「災害と語り」の意味をもっている。そして、その一方で、語りえない些細な状況および聞き手を想定しない、個人の体験の次元をどう拾いえるのかの問題である。それが、災害復興の政治および国家の一方的な「復興」論理に‘選択される語り’にならない方法であろう。

そして、もう一つ事例として取り上げたいのは、筆者が直接聞き取りを行った富岡町住民の語りである。ある意味対面空間において当事者の語りと聞き手の現場で感じ取った「新しい世界の『実録』」とでも言いうるものであろう。つまり、郡山における富岡町の住民でありながら、その富岡

町からの脱出、そして、「失郷民」として、故郷を失ったこと、または家族関係から新しい世界を構築していこうとする「新アイデンティティの」悟りであった。事例②、つまり、富岡町住民のAさんの語りは、紙面の都合上省いたのであるが、そこでの語りには「形態」および範疇化されない「自覚」された「個人」の語りがみえてきた。それには、設住宅住民の語りとして人括りはできない語りと記憶が存在していた。

このような観点から、〈記憶〉というコンセプトがもつ意味を二点感じ取ることができた。一点目は、一枚岩的な単数形の〈歴史〉を、ときに互いに矛盾する複数形の歴史／物語へと開いていくべき事は可能かということであり、二点目は、過去を表象する際、過去を客観的な事実に基づいて再現するのではなく、現在の視座によって選択的に再構成するのである。過去はおのずから生成するものではなく、社会的に再構築されるものであり、いかなる過去の物語が選択されるかは想起する現在に依存することが強調されることへの自覚であった。

言い換えれば、民話語りの事実性確保という「語りの構造」、つまり、表現活動の導入前、事前準備、当日、事後とそれぞれの段階に応じた配慮に乗ることによって指示される「経験」と「自由意志語り」の語りもつ自覚的語りの可能性である。この両面性は、ナラティブ・ターン、つまり「転換」した主体性やまだ自己解放および啓示のアクションが感じられる。ナラティブを通して自分の自我が新しいフィールドという空間を求め、その語りによって現実との新しい向き合いを作り出すのである。これは語り手と聞き手の「間」に「共有」を生むための入口であろう。この問題は、やはり、現場から理論をどう立ち上げるかの問題につながることであり、出来事の意味が再構成されるという事実である。

一人の体験を思い出して語るということの意味は、過去というものは言語行為によって再構成されていることの限界でもあるが、そこから同一の出来事でもさまざまな記述が可能であり、記述者がいつそれを記述するかによって、また記述の仕方も変動するという歴史記述の問題とも重なっている。そこでもうひとつ重要なのは、聞き手の

「アイデンティティ」である。つまり、ここで強調する観察とは、現場に身を置きつつも、その語り部の語りを読むことである。語りを否定することではなく、その語りのなかで「作為される事実と真実に「再編性」の問題であろう。それは、語り手が何か「仕掛けられた」語りによる「語り」に陥る恐れをも含め、自己語りを持ちうる自覚的語り、それが歴史化されない恐れを持っていることを考えてみた。それは被害者の現場と状況により異なること、その違いの「語り」の異相を考えざるを得ないことである。その傍ら、聞き手は、非被害者であることから「共有」されないまま、解釈され「理解」されてしまう恐れがある。

このように社会的な存在としての「自己完結的な理解」というのは、近代国民国家の秩序によって意味づけられ、国家の歴史となっていく。言い換えれば、「近代国家」が作り上げたものだと考え直し、その記憶の「幻視」から脱し、自分の「自覚」的な語りを作りなおすことによって、ものの再現による記憶の語りではなくなる。これは、語り部と聞き手による、自覚をともない、国家とか政治から脱する「自我」をみる瞬間であろう。それは、すでに述べてきたように、国家の政治が私たちの身体や言葉などにも網のめのように隈なくいきわたっていることを再確認することである。このような「政治」なるものは、いつの間にか自我の無意識のなかで内面化し、自我を制度のなかで制御する磁場である。これこそが、語りから得るもの「わたしの発見」であろう。

4 おわりに

本論考では、ナラティブという外来〈概念〉が物語りと出会い、その内的文化による解釈がどのように定着するのかその過程で生まれる「語り」と「民話」の関係をのべ、その語り部の語りのなかに含まれざるを得ない「記憶の形態」を分析した。それを踏まえて、被害の当事者が語る語りのなかに存在する記憶の「意味」を導き出そうとした。つまり、記憶を語ることは、民話を語る「声」から「記憶」を再編し聞き手に継がれていこうとする試みがある。これは、民話語り部が災害を語

る事実という意味で語り継がれていくべきものであろう。その傍ら、語り部とか民話的な構造を意識しない生活のなかで暮らしている「方々」のナラティブからも「記憶の事実」を拾い上げることができるのである。後者のように設定されないままに語る災害語りには、自我の変化を語り、語りのなかに含まれる「構造」を見抜く「自我」が生まれてくる。

これを聞き手側も語り部の語りの「自覚」を観察し、自我のなかに存在する非自我的なものを気づかせ、新しい自我を構築させる「動き」になってくるのである。これは、現実的な経験のなかで、つまり、自分のなかに存在する「他者」を体験するなかで、〈わたし〉が見出されるものとしてであろう。この意味で災害を語る語り部は、災害の事実を語り、その一方でその語りによって「自我」の変容をもたらし、その災害の語り部が国家に収斂され、一つのまとまってしまった大文字の歴史として作られていくことを警告するのである。そして、ものによって仕掛けられたことから距離をおき、災害と語りによって「記録」の方法を差異化させるのである。それから歴史そのものの再構成を成し遂げると同時に、語りによって自分に起こりうる事件を自らの力で考えられる〈独自化〉を模索させることに「人間」の事前復興がつながりうると思われる。

注

- 1) 友沢悠季『「なかったこと」にさせない思いをつなぐ営みとしての歴史叙述』『歴史学研究』No. 935、p. 29、2015年。
- 2) 小田桃子「W. G. ゼーバルト『カウステルリッツ』におけるコレクション:〈歴史〉と〈記憶〉のはざままで」『DA』10、神戸大学ドイツ文学会、p. 47、2014年。
- 3) 森岡正芳『臨床ナラティブアプローチ』ミネルヴァ書房、p. 32、2015年。
- 4) 磯前順一『死者のざわめき——被災地信仰論』河出書房新社、p. 120、2015年。
- 5) H. R. マトゥラーナ・F. J. ヴァレラ・河本英夫訳『オートポイエーシス——生命システムとは何か』国文社、pp. 70-71、1991年。
- 6) 小野和子『3.11を語り継ぐために』『震災と語り』三弥井書店、pp. 102-106、2012年。